



環境省  
Ministry of the Environment

# 生きものとの 出会いの旅を創る

国内・海外 20の事例



# 目次

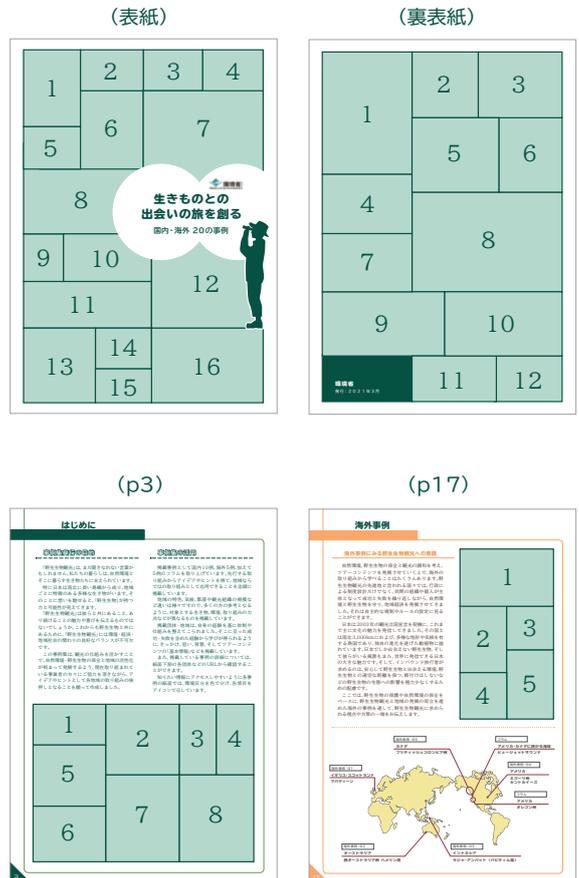
■ 目次		p 1
■ はじめに	(事例集発行の目的 / 事例集の活用)	p 3
■ 国内事例		p 4
事例 1	<b>海</b> (ウミガメ、ザトウクジラ) 絶滅危惧種アオウミガメの保護を基にした学習ツアー [東京都 小笠原諸島・父島] 認定NPO法人 エバーラスティングネイチャー(小笠原海洋センター)	p 4
事例 2	<b>海</b> (イルカ) ~島民とイルカとの上手な共生関係~ 地域の観察ルールで楽しむイルカウォッチング [東京都 御蔵島] 海豚人丸	p 5
●コラム	アメリカ オレゴン州:コククジラのウォッチングガイドライン アメリカとカナダの国境海域に棲む世界一汚染されたシャチの群れ	p 6
事例 3	<b>汽水・河川</b> (湿地の鳥類) ~ マングローブ林と田芋畑、水田域などの湿地を地域振興に活かす ~ バードウォッチングを中心とした自然体験による観光誘致の展開 [沖縄県 金武町] 合同会社 沖縄ネイチャーオフィス	p 7
事例 4	<b>広域</b> (生態系そのものを学ぶ) 国立公園における野生動物観光のあり方 ~ 共生と理解 ~ [北海道(道東)、沖縄県(西表島)] 株式会社 Wondertrunk&co.	p 8
事例 5	<b>里地里山</b> (シカ、ヤマメ、イワナ) 住民によるNPO法人が核となり、豊かな自然と文化を次世代へ [山梨県 小菅村] NPO法人 多摩源流こすげ	p 9
事例 6	<b>里地里山</b> (ツキノワグマ、ムササビ、野鳥など) ~ 観光・別荘地の魅力は自然と野生生物 ~ 観光を支えるツキノワグマ保護管理と学習コンテンツ [長野県 軽井沢町] 株式会社 ピッキオ	p 10
●コラム	野生動物観光と持続可能な開発目標(SDGs)	p 11
事例 7	<b>高山</b> (高山帯の生き物、ライチョウ) 山のガイドによる高山帯での新しい野生動物観光 ~ ライチョウ観察ツアー ~ [日本アルプス山域] 一般社団法人 日本アルプスガイドセンター	p 12
事例 8	<b>森</b> (コケ植物、シダ植物、キノコ) ~ 持続的な組織経営を目指す ~ インバウンド旅行者を見据えた人材育成と多様な事業展開 [青森県 十和田市] NPO法人 奥入瀬自然観光資源研究会 / 株式会社 ESARIO	p 13
事例 9	<b>森</b> (シカ、カモシカ、ムササビ、コウモリなど) 自らの発見、感動を大切に した宿泊学舎を活かした野生動物との時間を過ごすツアー [山梨県 早川町] 南アルプス生態邑(株式会社 生態計画研究所)	p 14
事例 10	<b>森</b> (夜行性希少生物(哺乳類・両生類・爬虫類)) 産・官・民の協力で作る 野生動物観光の地域ルールとその実践 [鹿児島県 奄美大島] 観光ネットワーク奄美	p 15
●コラム	鳥取県 日南市:インバウンド旅行者向けツアーで天然記念物オオサンショウウオの保全を推進 北海道 札幌市:インバウンド旅行者にも評価される動物園展示を目指して ~科学的知見で地域へ誘う~	p 16

# 目次

■ 海外事例	p 17
海外事例にみる野生生物観光への意識	p 17
事例1 <b>海</b> (イルカ、磯の生き物) 観察はイルカに優しく陸上から～海の生態系とその保全を学ぶ～ [イギリス・スコットランド(アバディーン)] The Royal Society for the Protection of Birds(RSPB)	p 18
事例2 <b>海</b> (エイ) 餌付けを止めて自然なエイの観察観光へシフト [オーストラリア 西オーストラリア州 ハメルン湾] Hamelin Bay Holiday Park (海洋公園)	p 19
●コラム：～海外ではすでに当たり前～ 自然と生き物に最大限配慮した観光ツアー	p 19
事例3 <b>海</b> (サンゴ、海洋生物) ダイビングエコロジから始まる海の再生と雇用の創出 [インドネシア ラジャ・アンパット(バビティム島)] Misool Eco Resort	p 20
事例4 <b>広域</b> (野鳥(猛禽類)) 野鳥保護施設による「傷病鳥」から学ぶ自然環境の治療 [アメリカ ミズーリ州 セントルイス] The World Bird Sanctuary(NGO)	p 21
事例5 <b>森</b> (ハイログマ(グリズリーベア)) 環境に配慮した安心感とともに非日常の体験を提供 [カナダ ブリティッシュコロンビア州] Great Bear Tourism / Comercial Bear Viewing Association (CBVA)	p 22
■ 野生生物観光の関係法令とその活用	p 23

## 【写真協力】

- ・海豚人丸：裏表紙10,p5(東京都御蔵島,イルカ)
- ・合同会社 沖縄ネイチャーオフィス：裏表紙\_No.6,p7(沖縄県金武町,セイタカシギ)/裏表紙\_No.9(沖縄県金武町)
- ・株式会社 Wondertrunk & co.：表紙\_No.6,p8(西表島,カンムリワシ) / 裏表紙\_No.3,p8(北海道 道東,オオハクチョウ)
- ・NPO法人 多摩源流こすげ：裏表紙\_No.7,p9(山梨県小菅村)
- ・株式会社 ビッキオ：裏表紙\_No.4(長野県軽井沢町[浅間山])/p10(長野県軽井沢町,ツキノワグマ)
- ・一般社団法人 日本アルプスガイドセンター：表紙\_No1(日本アルプス山域)
- ・NPO法人 奥入瀬自然観光資源研究会：裏表紙\_No.8,p13(青森県十和田市[奥入瀬渓谷])
- ・株式会社 南アルプス生態邑：裏表紙\_No.1,p3\_No.5,p14(山梨県早川町,カモシカ)/裏表紙\_No.5,p3\_No.6,p14(山梨県早川町)
- ・観光ネットワーク：p15(鹿児島県奄美市[奄美大島\_金作原])
- ・ジェシカ・ワン：表紙\_No.11(スコットランド アバディーンハーバー)
- ・株式会社 地域環境計画：表紙\_No.2(北海道,キタキツネ)/表紙\_No.3(大分県竹田市,アキアカネ)/表紙\_No.4(滋賀県甲賀市,アナグマ)/表紙\_No.5(鹿児島県奄美市[奄美大島],アマミシカワガエル)/表紙\_No.7((鹿児島県奄美市[奄美大島],ヒカゲヘゴ)/表紙\_No.8(沖縄県本島北部[やんばる])/表紙\_No.9(スコットランド,カツオドリ)/表紙\_No.10(香川県小豆島,カモメ)/表紙\_No.12((鹿児島県奄美市[奄美大島])/表紙\_No.13(スコットランド,ウミガラス)/表紙\_No.14,p18(スコットランド アバディーン,バンドウイルカ)/表紙\_No.15,p17\_3(カナダ,キンイロヅリス)/表紙\_No.16(カナダ[カナディアンロッキー山脈])/裏表紙\_No.2(長野県[木曾駒ヶ岳],チングルマ)/裏表紙\_No.11(沖縄県本島北部[やんばる])/裏表紙\_No.12,p4(東京都小笠原村,アオウミガメ)/p3\_No.1(北海道[大雪山国立公園])/p3\_No.2(北海道[雨竜沼湿原],ミズバショウ)/p3\_No.3(大阪府能勢町,アオバズク)/p3\_No.4(沖縄県本島北部[やんばる],リュウキュウハグロンボ)/p3\_No.7(沖縄県,マングローブ(ヤエヤマヒルギ))/p3\_No.8(沖縄県本島北部[やんばる])/p17\_No.1(カナダ[カナディアンロッキー])/p17\_No.2(マレーシアランカウイ島)/p17\_No.4(スコットランド,ユリカモメ)/p17\_No.5(マレーシア コタキナル[キャノピー・ウォーク])/p18(スコットランド アバディーンハーバー)



# はじめに

## 事例集発行の目的

「野生生物観光」は、まだ聞きなれない言葉かもしれませんが。私たちの暮らしは、自然環境とそこに暮らす生き物たちに支えられています。

特に日本は南北に長い島嶼から成り、地域ごとに特徴のある多様な生き物がいます。そのことに想いを馳せると、「野生生物」が持つ力と可能性が見えてきます。

「野生生物観光」は彼らと共にあること、あり続けることの魅力や喜びを伝えるものではないでしょうか。これからも野生生物と共にあるために、「野生生物観光」には環境・経済・地域社会の関わりのできる良好なバランスが不可欠です。

この事例集は、観光の仕組みを活かすことで、自然環境・野生生物の保全と地域の活性化が相まって発展するよう、現在取り組まれている事業者の方々にご協力を頂きながら、アイデアやヒントとして各地域の取り組みの後押しとなることを願って作成しました。

## 事例集の活用

掲載事例として国内10例、海外5例、加えて5例のコラムを取り上げています。先行する取り組みからアイデアやヒントを得て、地域ならではの取り組みとして応用できることを念頭に掲載しています。

地域の特色、気候、集落や観光組織の規模など違いは様々ですので、多くの方の参考となるように、対象とする生き物、環境、取り組みの力点などが異なるものを掲載しています。

掲載団体・地域は、自身の経験を基に体制や仕組みを整えてこられました。そこに至った成功・失敗を含めた経験から学びが得られるように、きっかけ、狙い、背景、そしてツアーコンテンツの「基本情報」などを掲載しています。

また、掲載している事例の詳細については、紙面下部の各団体などのURLから確認することができます。

知りたい情報にアクセスしやすいように各事例の紙面では、環境区分を色で分け、各項目をアイコンで示しています。





## - 01

[東京都 小笠原諸島・父島] 認定NPO法人 エバーラスティングネイチャー(小笠原海洋センター)  
絶滅危惧種アオウミガメの保護を基にした学習ツアー

### ！ 注目ポイント

- ・野生生物と人の営みが持続できる社会づくりを目指して海洋生物の保護活動を展開
- ・島の観光資源であり食材でもあるアオウミガメ(絶滅危惧Ⅱ類)の保護を主軸に利活用にも触れたコンテンツを提供
- ・海洋センターは博物展示だけでなく、ウミガメの生態や保護活動を紹介。オリジナルグッズや学習冊子、研究報などを販売し、観光施設としても機能
- ・地域の学校教育や修学旅行の積極的な受け入れだけでなく、地域住民にも学習体験の場を提供

### 📍 地域の情報

東京から約1000km南の太平洋上にある海洋島。そこに生息する生き物たちは独自の進化を遂げたものが多く、特徴的な生態系が世界自然遺産となっています。小笠原諸島では複数の島々でアオウミガメの産卵地が確認されています。



### 📄 取り組みの背景と概要



- ・小笠原海洋センターは1982年に設立され、管理運営主体が替わりながらも、センターの目的は変わらず、アオウミガメとザトウクジラの保護、研究に注力し、現在に至ります。
- ・運営する団体は、海洋保全の面から「野生生物と人の営みが持続できる社会づくり」を進めており、スタッフの多くは海洋生物の専門家です。
- ・人が暮らすエリアに近い海岸では、人工的な光によって、ふ化した子ガメが海を目指すことを妨げてしまいます。海に帰れずに死んでしまう子ガメを減らすために卵の保護を行い、人工ふ化させた子ガメを暗い海岸で放流することが、一つの対策となります。これまでの努力もあって、小笠原のアオウミガメは、30年間で10倍に増えています。
- ・これらの成果は海外に発信するだけでなく、地域住民にも伝えていきます。小さな子供から小中学生に至るまで、地域の子供たちは総合学習などを通じてウミガメについて学びます。また、島外からの学習旅行の受け入れも盛んです。ウミガメが窮地にあることが広く知られるだけでなく、センターの収益増にもなり、ウミガメ保護の良いサイクルが生まれています。

### ➡ 団体などの詳細はこちら

【小笠原海洋センター】 <http://bonin-ocean.net>  
 【エバーラスティングネイチャー】  
<https://www.elna.or.jp/>  
 【小笠原ルールブック】  
[https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp/ecotourism\\_index/rulebook/](https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp/ecotourism_index/rulebook/)  
 【東京都小笠原支庁 観光客の方へ】  
<https://www.soumu.metro.tokyo.lg.jp/07ogasawara/visitor/index.html>

### 🔍 代表的なコンテンツ [2021年2月現在]

- ・アオウミガメの生態と保護活動を学ぶ「ウミガメ教室」  
 (2時間 大人3,300円、  
 3時間 大人5,500円)
- ・短期飼育した子ガメを放流する放流体験(7,700円)
- ・クジラ教室  
 (室内、1時間 大人2,200円)  
 など



### ⚖️ 環境保全と経済の両立



- ・観光資源であるザトウクジラについても個体識別することで、年齢や成長、社会構成、出産間隔、生息数などを調査しています。
- ・アオウミガメは、地域の食材であり、観光資源です。かつては大きく減少しましたが、保護活動により、その生息数は増加。小笠原名物であるウミガメ漁とウミガメ料理の維持にもつながっています。東京都は毎年のウミガメの漁獲量を制限しており、その権利は承認された漁師に限られています。
- ・また、小笠原村は観光に関するルールを定めています。

#### 【観光に関するルール】

- ・産卵に来るウミガメへの対応として、ライトは足元だけ、出会ったら動かない。
- ・目撃情報を海洋センターに伝える。
- ・産卵巣に近づかないこと。



[東京都 <sup>みくらしま</sup> 御蔵島] <sup>うみとんちゅまる</sup> 海豚人丸

## - 02 ~ 島民とイルカとの上手な共生関係 ~ 地域の観察ルールで楽しむイルカウォッチング

### ！ 注目ポイント

- ・東京都と村のエコツーリズム協定により、イルカの生態に配慮したドルフィンウォッチング&スイムツアーを季節限定で展開
- ・イルカの生態、暮らしを優先した島独自の観察ルールを設けてウォッチングツアーを実施
- ・参加費に海域協力金(300円)を含み、人とイルカの共存を図るためのイルカ調査に活用
- ・東京都認定自然ガイドである船頭、ガイドがイルカと島の原生林(ガイド同行の規制あり)を案内

### 📍 地域の情報

御蔵島は、東京都心から南へ約200km離れた人口300人程の小さな島です。スダジイの大木を有する原生林のある自然豊かな火山島で、周辺海域にはミナミバンドウイルカが生息しています。



### 📄 取り組みの背景と概要 📞 ヒアリング情報

小笠原諸島などで地域独自の観察ルールを定めて、クジラ、イルカウォッチングが進められる中、御蔵島でも事前に御蔵島イルカ協会によるイルカウォッチングの自主ルールが定められました。海豚人丸もこの動きに合わせてツアーをスタート。船頭とガイドは、東京都認定自然ガイドの資格をもち、イルカ本来の生活を優先し、観察による影響を与えないツアーを心がけています。2004年には東京都エコツーリズム協定により、イルカウォッチングができる季節が限定となるなど、貴重な観光資源であるイルカの保護と利活用が進められてきました。

### ✅ 東京都エコツーリズム協定と御蔵島の自主ルール 📞 ヒアリング情報

東京都と御蔵島村との間でエコツーリズム協定が結ばれたことで、それまで無秩序に行われていたイルカウォッチング事業への規制が行われるようになりました。

また、御蔵島イルカ協会(解散)から引き継いだ御蔵島観光協会が中心となってイルカと人間とのより良い関係形成のため、自主ルールの遵守を呼び掛けています。

【東京都エコツーリズム協定でのルール】

- ・保全促進地域：御蔵島全体と汀線より1kmの範囲
- ・利用期間：3/15～11/15(冬期間は休止)
- ・利用時間：5:30～17:30(1出港あたり最長3時間)
- ・隻数上限：45隻/日(御蔵島船30隻、三宅島船15隻)
- ・1隻当たりの上限：スイムの場合13名、船上観察の場合法定定員

【自主ルール】

- ・イルカの食事や交尾、出産などの自然な行動を妨げない。
- ・小さい子供を連れた群れにはこちらから接近しない。
- ・水中で寄って来ないイルカのグループには再度エントリーしない。
- ・イルカに触らない。触ろうとしない。
- ・イルカに餌を与えない。
- ・スキューバダイビングでイルカに接近しない。
- ・ホイッスル、ダイビングコンピューターなど、人工音を発する器具は使用しない。
- ・水中カメラで撮影するときはフラッシュを使用しない。
- ・「自撮り棒」は水中に持ち込まない。

### 🔍 代表的なコンテンツ [2021年2月現在]

- ・ドルフィンウォッチング&スイムツアー  
(2時間 大人8,500円、小学生以下7,500円  
\*海域協力金300円含)

### 📝 ガイドの質の維持向上のための東京都認定ガイド講習 📞 ヒアリング情報

東京都は認定ガイドの資格を維持するために2年に一度、受講(講習時間、新規：22時間、更新：10時間)を課し、ガイドの質の維持向上を図っています。受講資格者は、御蔵島に住民票がある島民に限定しており、島民以外は、御蔵島村長の推薦が必要で、外部からのガイドが極端に増えるのを防いでいます。

### ➡ 団体などの詳細はこちら

- 【海豚人丸HP】 <http://umiton.blue.coocan.jp/>
- 【御蔵島観光協会自主ルール】  
[https://mikura-isle.com/?page\\_id=379](https://mikura-isle.com/?page_id=379)

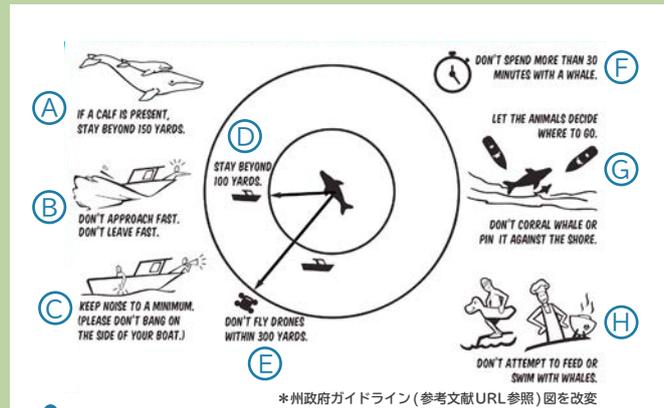


【アメリカ オレゴン州】

## コククジラのウォッチングガイドライン

アメリカ・オレゴン州のホエールウォッチング産業の成長は著しく、その経済効果は2008年には約3,000万アメリカドル(約32億6,700万円、1ドル=109円換算)に達し、この地域だけで64万5千人以上もの集客がありました。この海域はコククジラの太平洋グループが利用する採餌エリア(B34 The Pacific Coast Feeding Group of Gray whales(PCFG))として指定されており、同時にホエールウォッチング船を含む様々な船舶の往来が集中する海域でしたが、この海域における鯨類への配慮に関する船舶の運航ガイドライン(鯨類への配慮に関するもの)は存在しておらず、ホエールウォッチングの事業者たちは、30年にわたる観察船の運航の歴史の中で、コククジラがこの海域を離れたことはなく、地域ルールで十分であり個体に配慮したガイドラインの設定は不要だと考えていました。

しかし、2015年に「船舶のコククジラへの影響」を調査する2カ年のプロジェクトが完了したことで、ウォッチング事業者たちは州政府によるガイドラインによって運航が規制されることに懸念を抱きました。そこで、調査に携わった科学者たちは4回にわたるワークショップや啓発イベントなどを通して、最新の調査結果を事業者や地域住民に共有したり、他の地域で導入しているガイドラインについて解説したりするなどして、事業者や地域住民との交流を続けました。その結果、全てのステークホ



\*州政府ガイドライン(参考文献URL参照)図を改変

### 全ての船舶に対するガイドライン

- (A) 子クジラがいる場合は150ヤード(約138m)距離をあげる
- (B) 急速での接近や退避をしない
- (C) 音の発生は最低限に抑える(船体をたたいて音を出さない)
- (D) クジラから100ヤード(約92m)の距離を常に保つ
- (E) クジラから300ヤード(約275m)以内ではドローンを使用しない
- (F) 30分以上はクジラの周辺に滞在しない
- (G) クジラの移動を妨げず、船舶で囲まない、岸に追い込まない
- (H) クジラに餌を与えたり、一緒に泳がない

ルダー(利害関係者)を巻き込む形で、この海域のコククジラと観光産業やその他の海洋産業が持続可能な形で共存するためのガイドラインが作成されました。

このような地域に根差した自主ガイドラインは、日本においても導入されており、クジラ、イルカウォッチングが盛んな地域には概ねホエールウォッチング協会が存在しています。小笠原ホエールウォッチング協会(<http://www.owa1989.com/watching>)などがその代表例です。

【参考文献】 Assessment of vessel disturbance to gray whales to inform sustainable ecotourism  
<https://wildlife.onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1002/jwmg.21462>

【州政府ガイドライン】 <https://watchoutforwhales.org/>

## アメリカとカナダの国境海域に棲む世界一汚染されたシャチの群れ

アメリカとカナダに跨がる海域のプージェットサウンド(Puget Sound)を利用するシャチの群れは、生物濃縮により化学物質を体内に蓄積することによる汚染が深刻で、世界的に最も汚染されたシャチの群れとして知られています。このシャチの群れの個体数は急激に減少しており、その主な原因は餌不足、海水の汚染(化学薬品の流入)、船舶の騒音による悪影響などと考えられています。シャチはカナダとアメリカの両国で絶滅危惧種として指定されており、2018年にはブリティッシュコロンビア州(カナダ)、ワシントン州(アメリカ)の両州と船舶会社、ホエールウォッチングツアー会社、環境NGO、大学機関などの様々なステークホルダー(利害関係者)が集まり、このシャチの群れの保護プロジェクト(The Southern Resident Orca Task Force(SROTF))を立ち上げました。このプロジェクトには多額の資金が投入され、あらゆる対策を実施していますが、未だに生息数の減少に歯止めがかからず、絶滅の危機は増すばかりです。

このシャチの群れは、たとえ莫大な資金と労力を費やしても、一度バランスが崩れた生態系や野生生物の生息数を回復させることがいかに難しく、時間がかかることなのか、そして時には不可能であるかを教えてくれています。

【参考文献】 <https://www.governor.wa.gov/issues/issues/energy-environment/southern-resident-orca-recovery/task-force>



## - 03

[沖縄県 金武町] 合同会社 沖縄ネイチャーオフィス  
 ～ マングローブ林と田芋畑、水田域などの湿地を地域振興に活かす ～  
 バードウォッチングを中心とした自然体験による観光誘致の展開

## ! 注目ポイント

- ・日本最北端のヒルギモドキを含むマングローブ群落を守り、その保全を基盤として、観光資源や環境学習などの場としての価値を広めるために地域に協議会を設立
- ・鳥類観察ツアーのフィールドは、県内最大級の田芋畑を含む水田域(湿地)
- ・鳥類保全と農業振興が一体となった取り組みと、それらを活用した地域ならではのストーリーがあるアドベンチャーツーリズムの企画を進行中

## 📁 取り組みの背景と概要



- ・きっかけは、金武町によるマングローブカヌーガイドの養成研修の講師を担ったことでした。
- ・金武町に生息する鳥類を長きに渡り調べており、鳥類を通して見える町の特徴と魅力を伝えることが、観光のコンテンツとなり、地域振興が図れると強く感じました。
- ・教育委員会の協力を得て、「金武町で確認された鳥類の記録」を冊子にまとめ、同時によく見られる鳥類と観察方法を記した普及版パンフレットを作成して、町内の学校、生徒、観光事業者、農家などに無料配布しました。
- ・マングローブだけでなく、県内最大級の田芋畑と水田地が多く、多くの鳥類の生息地、繁殖地となっており、その継続、振興は鳥類の保護につながります。鳥類観察ツアーを重ねたことで、野鳥の重要性と観光への貢献が農家にも伝わり、協働で地域振興にあたっています。
- ・近隣のふくらしやや自然体験塾やネイチャーみらい館とも相互協力して、旅行者の受け入れなどの体制を整えています。更に町内の魅力をつなげて、アドベンチャーツーリズムを展開しようとコンテンツの作成を進めています。

## 🔍 代表的なコンテンツ [2021年2月現在]

- ・金武町でバードウォッチング (90分:大人4,000円、子供2,500円)
- ・億首川マングローブ観察 (同上)
- ・やんばるの固有種3種ツアー (5時間:大人13,000円以上、子供12,000円以上)



## 📍 地域の情報

億首川の河口近くにマングローブ林があり、この河川の両岸とさらに町の南側にある武田原(ンタバ)地区、西方にある屋嘉地区や伊芸地区にも田芋畑や水田が広がっています。

こうした河川と湧水地が水源となった湿地的環境が、タマシギやクイナ類、サギ類を含む数多くの鳥類の生息地や繁殖地となっています。



## ⚖️ 環境保全と経済の両立



- ・町の見どころ、アクティビティは、マングローブ観察とカヌー体験です。日本最北端のヒルギモドキを含むヒルギ群落を過度な利用から守り、持続的な活用を図るため、億首川環境保全推進連絡協議会を設立しました。その価値を広めるために天然記念物指定を目指しています。
- ・鳥類の生息には餌場となる河口部の干潟が重要です。マングローブ植物の無計画な植栽は、こうした環境を変貌させ甲殻類などが暮らす干潟の減少を伴う場合が多々あります。これは、鳥類の餌場を奪い、留鳥や飛来する渡り鳥の減少を伴うことから、植栽に頼らず、群落を健全な形で修復する方法などが検討、実践されています。田芋畑は多くの鳥類の繁殖地です。農家と協働で、その振興にあたっています。

## 📢 ターゲットと情報発信



世界のバードウォッチング需要は欧米人を中心に非常に高いことから、特に鳥類を対象としたツアーを展開しています。やんばる国立公園が世界自然遺産登録されると考え、インバウンド旅行者(訪日外国人旅行者)対応のスタッフが在籍し、英語で情報を発信する準備を進めています。

## ➡ 団体などの詳細はこちら

【沖縄ネイチャーオフィス】 <https://okinawa-nature.com/>  
 【ふくらしやや自然体験塾】 <http://www.kin-eco.com/>  
 【ネイチャーみらい館】 <https://www.nature-kin.com/>



## - 04

[北海道(道東)、沖縄県(西表島)] 株式会社 Wondertrunk&amp;co.

## 国立公園における野生動物観光のあり方

～ 共生と理解 ～



## ! 注目ポイント

- ・ターゲットは、アドベンチャーツーリズムや野生動物を含めた生態系に興味関心の高いインバウンド旅行者
- ・野生動物、自然環境への配慮を求める欧米人のニーズに応え、野生動物と人間との距離間を重視
- ・野生動物が暮らす環境で過ごし、その地ならではのアクティビティを通して感じる気づきや学び(Transformation(自己変革))を得ることができる体験を提供

## 🕒 地域の情報

## 道東

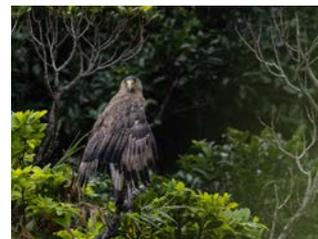
野生動物の聖地である知床や、火山活動によって形成された日本最大のカルデラを有する屈斜路湖や釧路湿原などの、豊かな自然環境があります。



## 📁 取り組みの背景と概要



- ・インバウンド旅行者に焦点を当てたマーケティング調査を実施すると、欧州の人々が自然、野生動物の体験旅行に高い関心を持つことが見えてきました。
- ・そして、野生動物観光においても動物福祉を大事にする欧米旅行者に応えられるコンテンツを作り上げる必要があることを認識しました。
- ・その地域ならではのアクティビティが体験でき、人を魅了する野生動物が生息すること。そして、十分な知識、サービスを提供できる専門家やガイドの確保が必要でした。人脈を辿り、時に紹介を受け、地域の人々と議論を重ねて、コンセプトに共感して下さった方々と出会ったのが北海道の道東地域と沖縄県の西表島です。
- ・丁寧に野生動物に向き合う上質な学びと見どころを備えたプログラムによる感動体験は、インバウンド旅行者のニーズに応えるものとなっています。
- ・また、野生動物への配慮、野生の姿を見るのに欠かせない、彼らとの距離間をプロのカメラマンを通して掴み、コンテンツに反映させました。



## 西表島

沖縄県八重山諸島に属する島です。大陸と陸続きであった時代があり、イリオモテヤマネコが生息しています。

## 🏛️ 環境保全と経済の両立



- ・日本の地域とインバウンド旅行者をつなげることには大きな利点があります。例えば、日本人は夏休み、冬休みなどに旅行が限定されますが、インバウンド旅行者は、季節に関係なく訪れます。欧米では、アドベンチャーツアーや野生動物観光についても質を保証し、安心できる旅となるようにABTA(英国旅行業協会)などの業界団体、民間団体などによるガイドラインが設けられています。地域の自然資源の活用法を考えて、世界標準の観光に応える体制づくりを早めに進めることが地域の暮らしを良くすることにつながります。

## 🔍 代表的なコンテンツ [2021年2月現在]

- ・大自然の中で野生動物と出会うツアー in 知床(2日間 大人23,900～70,100円)
- ・西表島の生態系を学び、大自然の営みを感じるツアー(4日間 大人128,900円～)

## 📡 ターゲットと情報発信



- ・欧州の方々には視点を絞り見どころがはっきりしたツアーが好まれます。
- ・ツアーの売り込みはマーケティング調査などでつながった欧州の現地旅行会社と連携して進められます。

## ➡ 団体などの詳細はこちら

[wondertrunk&co] <https://www.wondertrunk.co/ja/company/>

[ABTA(英国旅行業協会)動物福祉ガイドライン] ABTA Animal Welfare Guidelines | ABTA



## - 05 [山梨県 小菅村] NPO法人多摩源流こすげ 住民によるNPO法人が核となり、 豊かな自然と文化を次世代へ

### ！ 注目ポイント

- ・源流とその森を教材に自然との共生を学ぶ「多摩川源流大学」を主催
- ・野生動物との共生をテーマにしたツアーを経て、現在は猟師の技術を学ぶツアーを開催
- ・自然を利用した持続的な付き合い方を継承
- ・村民ガイドと地域連携によるツアーコンテンツ

### 📖 取り組みの背景と概要



- ・過疎化から村の存続を図るために、小菅村の自然や伝統的な農林業、文化などを村民たちから学び、次世代へつなげる事業を展開しています。
- ・村を守る事業の一環として、村からニホンザルやニホンジカのモニタリング調査の事業を受託し、並行して、野生鳥獣との軋轢や共生について学ぶ調査体験ツアーを企画しました。しかし、事業の終了とともに調査に対応できる人材の確保や、ツアー開催の資金繰りが厳しくなるなどの問題に直面し、開催を中断することとなりました。
- ・しかし、野生生物との共生や命と向き合う学びは、「多摩川源流大学」のプログラムの一つ、「猟師と一緒に山歩き」という狩猟体験の形で継承されていきました。狩猟体験は、閑散期である冬でも観光業や宿泊業の力になりたいと、冬の猟期に着目し、村の猟師から協力を得ることで企画が誕生しました。
- ・また、豊かな水源と水源林に着目し、川の中を歩きながら、ヤマメやイワナの生態について学んだり、森の役割や流域とのつながりを学ぶツアー、「源流体験」も行なっています。こうしたプログラムを通じて、多摩川源流域の自然を守り継承していく人材育成事業を行っています。
- ・今後も、多摩川源流域の自然との持続的な共生関係を築いていくために、ムササビが生息する森の保全やサンショウウオが住める川づくりツアーなどを考えています。
- ・自然の恩恵によって活動が継続できることを常に意識し、その思想を次世代へ継承していきたいと考えています。

### 👉 団体などの詳細はこちら

【NPO法人多摩源流こすげ】 <http://npokosuge.jp/>

### 📍 地域の情報

小菅村は山梨県の東北端に位置し、東京都奥多摩町に隣接。多摩川の源流部にあたり、都心から車で2時間で行くことができます。小菅川の源流部は東京都の水源涵養林として、100年以上前から森林の保全が進められ、巨樹巨木が林立する豊かな自然が残されています。



### 🔍 代表的なコンテンツ [2021年2月現在]

- 「多摩川源流大学」：老若男女だれでも参加OK、企業研修、修学旅行など企画しています。
- ・多摩川源流体験
- ・猟師と一緒に山歩き

### 📢 ターゲットと情報発信



- ・主に首都圏からのファミリーや源流域ならではの自然・文化体験をしたいという人たちです。自然体験が初めてという人が多く、参加者のおおよそ半数がリピーターです。





[長野県 軽井沢町] 株式会社 ピッキオ

- 06

～ 観光・別荘地の魅力は自然と野生生物 ～

## 観光を支えるツキノワグマ保護管理と学習コンテンツ

## ! 注目ポイント

- ・広大な森が広がる浅間山山塊とそこに暮らす多くのツキノワグマを始めとした野生動物を体験を通して学ぶコンテンツの提供
- ・豊かな自然に支えられる観光・別荘地の軽井沢でのツキノワグマの保護管理
- ・その経験を活かした独自の自然を伝える体験学習で次世代教育

## 📄 取り組みの背景と概要



- ・森林の開発があちらこちらで行われたバブル末期、ピッキオは軽井沢で誕生します。日本有数の避暑地であった軽井沢の価値は自然によって生み出されており、その自然を維持していく事が、地域経済の持続に欠かせないと考えていました。
- ・当時は、自然、森林に価値を見出す人はまだあまり多くない時代であった為、ピッキオは森林の価値を人々に示すことが必要という考えの下、ネイチャーツアーを実施していました。
- ・そんな折、公共のゴミ捨て場がクマによって荒らされる事件が多発します。当時はその様なクマが出現した場合は、駆除が一般的でしたが、“野生動物との共存”に理解のある軽井沢町と地域住民の協力を得ながら、トラブルや軋轢を回避するための取り組みが始まりました。
- ・野生動物との出会いは軽井沢の大きな魅力ですが、一方で住民の暮らしや観光客の安全も重要です。現在は行政や地域住民などと協力しながら、軽井沢に生息するクマに発信器をつけて監視と対応にあたっています。
- ・そして、この経験を観光、教育、学習旅行などのコンテンツとして活かし、軽井沢の魅力を世界に発信しています。
- ・クマに関する子供向けのプログラム、首都圏の幼稚園から大学生までを対象としたプログラム以外に、地域の小学校から高校までを対象に軽井沢の自然、クマの保護管理などを伝える授業を担っています。



## 📍 地域の情報

軽井沢町は上信越高原国立公園(普通地域)に属し、浅間山から広がる森は広大で新潟県まで続きます。

\*一部鳥獣保護区があります。



## 📖 代表的なコンテンツ [2021年2月現在]

- ・けもの道ウォーキング (3時間 大人5,000円)
- ・空飛ぶムササビウォッチング (3時間 大人3,400円、子供2,500円)
- ・野鳥の森ネイチャーウォッチング (2時間 大人2,500円、子供1,200円) など

## ⚖️ 環境保全と経済の両立



- ・豊かな自然とそこに暮らす野生生物。その出会いは、軽井沢の大きな魅力です。住民、観光客の安全を確保した上での野生動物との共存は、軽井沢にとってそのブランド価値を高める重要な取り組みと言えます。
- ・ピッキオでは、軽井沢町などからクマ対策の業務を請けていますが、この取り組みを継続していくために行政だけに頼らなくても運営できる持続可能な仕組み作りを意識しており、エコツアーからの収益も保護管理事業に一部充当する事で、よりバランスのとれた収益構造を目指しています。クマに関する学習旅行の受け入れもその一つです。また、賛同企業、個人からの寄付(ホームページで受付)もあり、様々な主体によって継続される仕組みづくりを進めています。

## 🎯 ターゲットと情報発信



- ・国内旅行者はもちろんですが、インバウンド旅行者の誘致に力をいれています。スタッフのほとんどは、専門知識に長けているだけでなく英語対応が可能です。
- ・そして、クマの保護管理の成果や軽井沢の自然の特徴などを海外メディアや論文などで発信しています。欧米からのインターンも複数受け入れており、軽井沢のクマの保護管理、魅力の発信につながっています。

## ➡ 団体などの詳細はこちら

【ピッキオ】 <https://picchio.co.jp/>

## 野生生物観光と持続可能な開発目標(SDGs)

「誰ひとり取り残さない」社会を実現するため、国連は 2030 年を目標年とした持続可能な開発目標 (SDGs) を採択しました。SDGs を構成する 17 のゴールは、①教育などの社会面、②経済面、③環境面の三側面をカバーしており、統合的に解決していくことを目指しています。この事例集で取り上げた野生生物観光の事例は、野生生物という地域の資源を来訪者に魅せることを通じて、経済的な利益を得られるようにするだけでなく、地域の方が地域への誇りや愛着を育む機会となり、野生生物が生息する自然環境の保全が進み、SDGs の目標達成に貢献するような事業・取り組みであるかという観点から選んでいます。

野生生物の保護や自然環境の保全と観光という経済活動を調和させることには、難しさをはらんでいます。一時の観光ブームにより、無秩序に大勢の人が押しかけ野生生物や自然環境に大きな負荷がかかり、健全な状態でなくなることにより、観光地としての魅力が大きく低下する事態は珍しいことではありません。過度な利用によって一度減少した野生生物や劣化した自然環境を回復させるには、長い時間と資金が必要になります。野生生物観光では野生生物や自然環境を守ること、そして野生生物との出会いに期待する来訪者の感動を深めるためにも正しい知識を広め、来訪の価値をさらに高めることが大切です。



掲載事例は、自然環境に生息する野生生物との向き合い方が、地域社会の発展にとっても大切であることを教えてくれています。より豊かな環境と地域社会づくりに貢献できる「野生生物観光」には、自然とともに生きる私たちの、これからの未来を拓く力があると考えています。

【国連広報センター SDGs】

[https://www.unic.or.jp/activities/economic\\_social\\_development/sustainable\\_development/2030agenda/](https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/)

## SDGs アイコン(全17目標)の紹介







[青森県 十和田市] NPO法人 奥入瀬自然観光資源研究会 / 株式会社 ESARIO

- 08

～ 持続的な組織経営を目指す ～

インバウンド旅行者を見据えた人材育成と多様な事業展開

## ！ 注目ポイント

- ・奥入瀬らしきのあるコケ、シダに注目したツアーの展開
- ・質や信用度を高めるため、プロとしてネイチャーツアー事業を株式会社化
- ・収入源を多様化させることで、事業運営の多角化でリスクを分散
- ・顧客ニーズの多様化を見越して英語・中国語のガイド養成研修を行う

## 🔍 代表的なコンテンツ [2021年2月現在]

- ・奥入瀬溪流コケさんぽ  
300種類以上のコケ植物が自生する奥入瀬溪流を散策(早朝75分、午後90分 3,500円から)など

## 📊 経営を維持するための 資金源と株式会社化、リスクヘッジ



- ・青森県では自然環境保全と安全な道路空間の確保を目的に溪流区間へのマイカー乗り入れを規制し、安全に迂回することが出来る道路の建設を目指す「国道103号青ブナ山バイパス事業」が平成25年度から進められています。既存の観光道路としても利用されている国道103号の利活用を考えるために基礎調査であるモニタリング事業が行われ、研究会はこれを担いました。
- ・その成果から水豊かな奥入瀬らしきのあるコケ、シダに注目したネイチャーツアーなどを開催してきました。しかし、ボランティア色の強いNPOではなく、本職として信頼度を高めるためにツアー事業をブランド化することにしました。それが、2019年12月に立ち上げた株式会社ESARIOです。
- ・社員はNPO法人スタッフを兼務しており、2つの組織は、それぞれの役割を持っています。
- ・会社立ち上げ当初から、新型コロナウイルスの流行により、ツアーの開催が中止され、経営の維持に支障が出ていますが、モニタリング事業の受注、奥入瀬の自然と生き物図鑑などを作成し、オンラインショップで販売。ガイドの講演、講師などによる多角的な経営により、資金調達の間口を複数設けることにより、経営リスクの分散対応を実現しています。

## 📍 地域の情報

奥入瀬溪流は、青森県と秋田県の県境に位置する十和田湖(カルデラ湖)から北東へ伸びる溪流で、溪谷地形に流れ込む多くの水流が空中湿度の高い独特の環境を作りだしています。



## 📖 ガイド講座 (日本語・英語・中国語)の経緯について



- ・将来、国道がマイカー規制され、歩行でのツアー旅行者の増加が見込まれることから、NPO法人では、青森県上北地域県民局および十和田湖奥入瀬観光機構からの受託事業として、奥入瀬溪流の自然の魅力を伝える次世代ガイド(日本語・英語・中国語)の養成講座を開設しています。
- ・以前、インバウンド旅行者に対し、ネイチャーガイド1人と通訳者1人で対応していましたが、専門用語が通訳の障害となっていました。その問題を解消するために、ガイド養成講座では、通訳者を対象に専門用語に関する英語講習を行なっています。その成果は表れており、英語通訳者だけでも、自然ガイドがある程度できるようになっています。さらに、受講生ネットワークによる自主勉強会も行われています。
- ・台湾からのインバウンド旅行者が多く、中国語ガイドの需要は十分に高いです。

## ➡ 団体などの詳細はこちら

[NPO法人 奥入瀬自然観光資源研究会]  
<https://www.oiken.org/>  
 [FORESTON(株式会社ESARIO)]  
<https://foreston.jp/>



[山梨県 早川町] 南アルプス生態邑(株式会社 生態計画研究所)

## - 09 自らの発見、感動を大切に した宿泊学舎を活かした野生動物との時間を過ごすツアー

### ！ 注目ポイント

- ・野生動物の調査に基づき、その生態に合わせた観察や接近で野生の姿に迫る
- ・宿舎と自然公園を一体として運営していることから、ツアー設定に施設利用の時間制限がない。
- ・それを活かした本物の体験として野生動物の活動時間に合わせた早朝夜間のプログラムを実施
- ・参加者の発見、気づき、そこから湧いてくる感動を最優先にした導き型のガイド

### 📍 地域の情報

早川町は山梨県の南西に位置し、糸魚川-静岡構造線(フォッサマグナ)が通る地域で、深い谷を大きな山が取り囲んだ地形です。町内の標高は300m未満から3000mを超えるところまであり、動植物が多様で、南アルプスユネスコエコパークに認定されています。



### 📄 取り組みの背景と概要



- ・2007年頃、早川町の魅力を伝えるための自然体験施設として、ビジターセンターにテコ入れすることになりました。その際、早川町の野鳥公園設計者の㈱生態計画研究所に相談がありました。そして、プログラムの展開や発展を考えて宿泊施設ヘルシー美里(中学廃校舎を改築)と併せて管理運営を担うことになりました。
- ・早川町の理念は自然と共生する町づくりを意識していました。このため、指定管理者として、運営に当たることに大きな意義を感じました。
- ・山深い地域であることから、自然を常に利用してきた文化と、集落内の自助共助の風土が、まだ色濃く残っていました。それを活かすプログラム開発を住民との連携で進めました。
- ・当初、野生動物を対象にしたツアーは住民には理解されませんでした。回を重ねるうちに、その集客力や観察行為による獣害の防止効果などが認識され、良い関係へと発展しました。
- ・生態調査は、ツアー利用に留まらず、早川町の野生動物保全に役立っています。
- ・宿泊施設利用時間の縛りがなく、対象野生動物の行動に合わせて早朝や夜間のプログラムを展開し、本物の体験を提供しています。

### 🔍 代表的なコンテンツ [2021年2月現在]

- ・ムササビウォッチングプラン (1泊2日 大人8,800円)
- ・野生動物ツアー アニマルウォッチングに挑戦！ (1泊2日 大人14,500円)
- ・ニホンジカ調査体験(日帰り1名2,200円)など



### ⚖️ 環境保全と経済の両立



- ・ガイドスタッフは野生動物の調査研究のスキルを持ち、観察から野生動物の心を探ることが出来るかのように行動を読み取ります。ツアーでは、動物の様子から嫌がっているか、過度な観察になっていないか判断して、プログラムを進めます。
- ・観察ルールの基本は触れない、大声を出さないなど野生動物に配慮した行動です。
- ・ガイドスタッフは参加者の発見を促し、それを大切にします。その理由は、自らの発見と感動こそが、参加者の心に刻まれ、大事なものを残すからです。

### 🎯 ターゲットと情報発信



- ・主に首都圏からのファミリーです。また、体験学習、教育旅行も主たるターゲットにしています。来場までのコストを考慮して、ツアー価格を抑える代わりにプログラム実施数を増やすことでコストを抑え、収益につなげています。

### ➡️ 団体などの詳細はこちら

【南アルプス生態邑】 <http://www.hayakawa-eco.com/>  
 【早川フィールドミュージアム】 <http://fm-hayakawa.com/fm>



## - 10

[鹿児島県 奄美大島] 観光ネットワーク奄美  
産・官・民の協力で作る  
野生生物観光の地域ルールとその実践

## ! 注目ポイント

- ・奄美大島エコツアーガイド連絡協議会による自主ルールに基づき、安全管理や環境配慮が図られたツアーの実施
- ・奄美大島利用適正化連絡協議会は原生林金作原での自然環境保全のために利用ルール(試行)を設け、ガイド同伴での入場とし、入場車数を制限
- ・事業者独自の自主ルールで、ナイトツアーは1日1台(6名)までとし、希少固有種が多い両生類・爬虫類のロードキル防止に注意を払って実施

## 👟 取り組みの背景と概要



- ・奄美大島は、島固有の生き物が生息し、その自然と向き合った独特の文化が見られます。自然と文化の独自性や美しい海、亜熱帯の環境などが多くの観光客を惹きつけ、この数年で観光客は急増してきました。
- ・地元出身者が大半を占める奄美大島の観光業者、野生生物ガイドを中心に奄美大島エコツアーガイド連絡協議会が結成され、固有の自然や文化を保全し、自然観光資源の適正かつ持続的な利用を図るために自主ルールを定めています。
- ・金作原原生林では、観光客の立ち入りをガイド同伴とし、同時入場車は10台までとした試行運用を行なっています。
- ・また、アマミノクロウサギ、ケナガネズミだけでなく、オットンガエルなど固有の夜行性両生類、爬虫類も多いことから、交通事故死の発生を回避するために、ナイトツアーが集中する三太郎林道でも環境省主導のもと利用制限の試行が始まっています。
- ・観光ネットワーク奄美は、島の変化を見届けてきた20年以上のガイド経験を持つスタッフから構成され、早くからナイトツアーによる固有の両生類、爬虫類のロードキルを回避する運行を行なってきました。現在、ワゴン車1日1台(6名まで)の自主ルールで実施しています。
- ・ツアーでは島固有の生態系、固有種への配慮だけでなく、危険生物への注意と対処についても伝えています。

## 📍 地域の情報

奄美大島は奄美群島国立公園に指定されています。亜熱帯植物ヒカゲヘゴなどが自生する金作原(きんさくばる)原生林があります。島には固有種のアマミノクロウサギ、アマミハナサキガエル、ヒャン、ルリカケスなどが生息しています。

## 🔍 代表的なコンテンツ [2021年2月現在]

- ・金作原探索コース(3時間 大人4,000円)
- ・夜の野生生物観察コース(3時間 大人8,000円)など

✅ 奄美大島エコツアーガイド  
連絡協議会による自主ルール 

協議会では、奄美群島に暮らす人、訪れる人など多くの方が楽しく自然と共存した持続可能な島々にするために動植物の保護、外来種対策、島の文化/生活、正しい情報提供、安全管理など幅広くルールを定めています。  
(詳細は、下記関連URL参照)

✅ 過剰利用防止のための  
ナイトツアー実証実験 

野生動物や自然環境へ配慮しながらナイトツアーをより安心して楽しむための利用ルールを検討するため、環境省によるナイトツアー実証実験が行われました。2021年2月現在、事業者や住民とともにルール整備を進めています。基本的に自動車での案内となることから、安全な運行方法、観察時の配慮などを示しています。  
(ルールの詳細は、下記関連URL参照)

## ➡ 団体などの詳細はこちら

【観光ネットワーク奄美】 <https://www.amami.com/>

【奄美大島エコツアーガイド連絡協議会】 <https://amamiguide.jimdoofree.com/>

【金作原の利用ルール】 <https://www.pref.kagoshima.jp/ad13/kurashi-kankyo/kankyo/amami/kinsakubaru.html>

【ナイトツアーの実証実験】 [http://kyushu.env.go.jp/okinawa/pre\\_2020/post\\_130.html](http://kyushu.env.go.jp/okinawa/pre_2020/post_130.html)

【鳥取県 日南市】 BUSHIDO

## インバウンド旅行者向けツアーで天然記念物オオサンショウウオの保全を推進

オオサンショウウオ科は世界に3種のみであり、そのどれもが希少です。その生息は、西日本、中国およびアメリカ東部に限定されています。

BUSHIDOのリチャード・ピアス(Richard Pearce)氏は、日本を訪れる外国人を対象としたエコツアーを開発しました。このツアーでは、オオサンショウウオ研究の第一人者と共にフィールドに足を運び、日本人でさえめったに出会うことのない生き物を間近で見えて勉強する機会を提供します。それは、参加者にとって貴重な学習体験となるだけでなく、重要な研究を進めるための仕組みにもなっています。ピアス氏にお話を伺いました。

「私はさまざまな国で研究者、ネイチャーガイド、サファリガイドとして働いた経験があり、日本へのインバウンド旅行者の誘致について政府機関に助言する機会がありました。その関係を通じて、日本ハンザキ研究所の岡田純(すみお)博士に会いました。

オオサンショウウオは法律で保護されており、訪問者は岡田博士などの資格のある研究者と一緒にないと間近で見ることができません。これは、ツアーのメリットであり、参加者を惹きつけるものだと感じました。

多くの参加者は、絶滅の危機に瀕しているオオサンショウウオを救いたいと思っています。ツアー料金には、地域の

環境保全活動への寄付が含まれています。参加者は重要なデータの収集に参加します。この作業中、私はそれぞれのやり取りを見守り、厳格な保護ルールが遵守されていることを確認します。

このツアーを宣伝するために、まず英語のウェブサイトを開設しました。その後、ツアーに関する科学界での口コミが重要になってきました。また、Tシャツをいくつか作成し、ソーシャルメディアで宣伝しました。そして、ツアー情報を宣伝してくれるイギリスの旅行代理店にも連絡しました。

重要なのは、このツアーが岡田博士に研究資金を提供し、私たちもツアーを通して研究に直接関わることです。岡田博士による重要な研究成果の多くは、博士の自己資金で行われており、そのことにまず驚かされました。日本は他の先進国に比べて研究資金の調達に問題を抱えています。ツアーに参加することは、岡田博士の研究を支援できるだけでなく、参加者の励みになり、希望を与えています。

現在、野生生物保全は、日本社会において比較的優先度が低いと感じています。私たちは将来、教育プログラムを通じてそれを改善したいと思っています。」(ピアス氏)

.....  
【BUSHIDO】 <https://www.bushidojapan.com/salamander>

【北海道 札幌市】 円山動物公園 / EnVision環境保全事務所

## インバウンド旅行者にも評価される動物園展示を目指して ～科学的知見で地域へ誘う～

国内では全国的に生息しているニホンジカですが、EnVision環境保全事務所ではインバウンド旅行者をターゲットとして、動物園展示と生息地との連携で、野生動物保全につながるコンテンツ作りを進めています。EnVision環境保全事務所にお話を伺いました。

「世界的に見て、日本の動物園展示は、普及教育や研究面で良いところが少ないです。アジアでは台北やシンガポールにある動物園の展示レベルが高く、日本は見劣りします。海外の良質な動物園を知っているインバウンド旅行者にも評価を得る動物園展示は、これから課題となってきそうです。そこで、北海道における野生動物、自然学習の拠点である円山動物園と協力して、科学的裏付けのある動物園展示と野生動物保全を試行することにしました。

計画当初は、アメリカの野生動物学会とのコラボを考え、元学会長が来日して、一緒に展示を考える計画もありましたが、コロナ禍の広がりによって来日が実現しませんでした。

対象動物となったエゾシカ(ニホンジカ)は、アジア圏では、絶滅危惧種(補足:台湾などでは絶滅。IUCNレッドリストLC)であり珍しい動物です。欧米では、日本と同じように増えすぎたシカ類の問題が多発しています。

そこでエゾシカは、インバウンド旅行者向けのコンテンツになると考えました。

根室市にある塩性湿地に生息するエゾシカにGPS首輪を装着し、15分間隔で位置データを記録しました。蓄積データを基に塩性湿地でのシカの暮らしを紹介する展示を作成中です。根室市や道内のエゾシカ観察地を紹介することで、インバウンド旅行者の訪問、観光につなげられると考えています。具体的にはビジターセンターや観光協会などを紹介する流れになるでしょう。

日本の動物園展示の課題は、福祉と教育以外にも多言語展示、多言語ガイドに乏しいことです。また、北海道では、多言語の観光ガイドの制度も整備されていません。

これまで多くの事業で、観光振興が前に出すぎて、野生生物への影響を心配するケースがありました。今回の取り組みは、科学的正当性と動物園がもつ、各地の団体、個人とのネットワークを強化し、活かすために進めています。」

(EnVision環境保全事務所)

.....  
【円山動物園】 <https://www.city.sapporo.jp/zoo/>  
【EnVision環境保全事務所】 <http://www.env.gr.jp/>

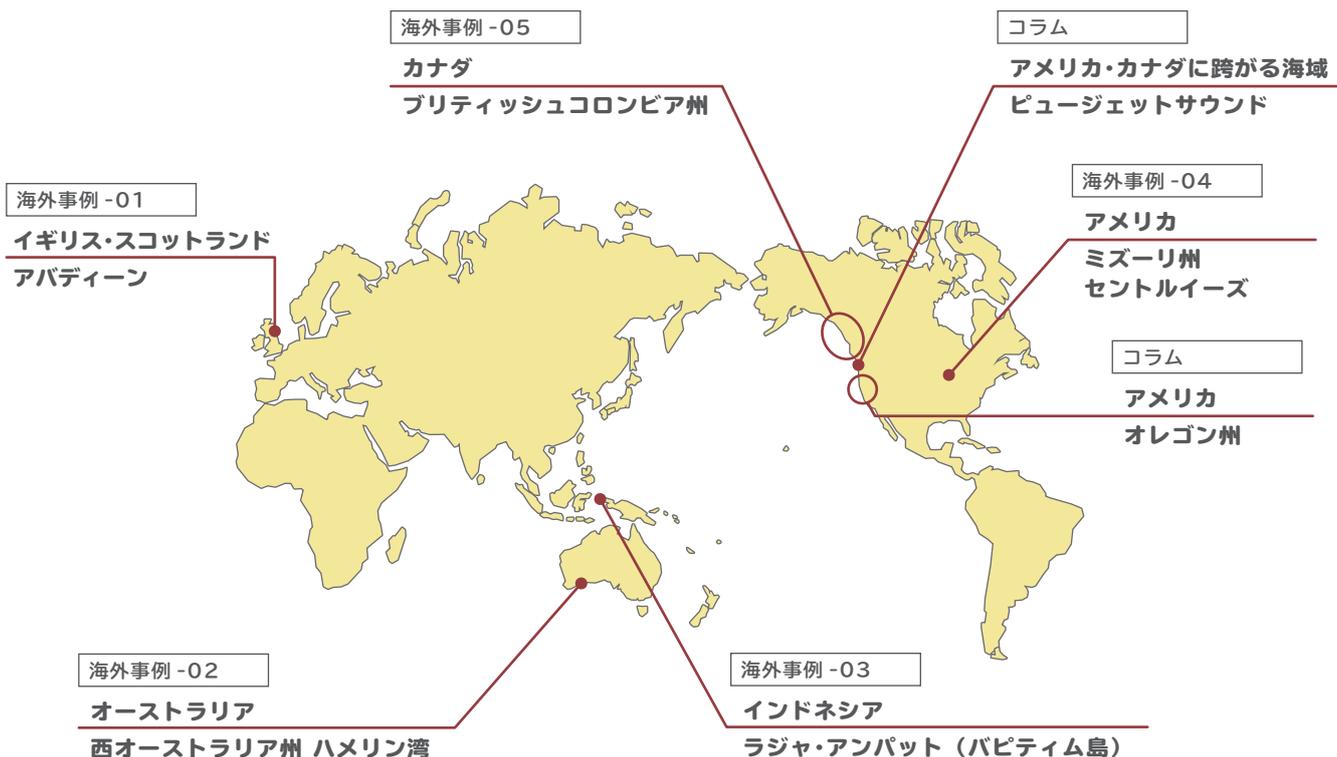
# 海外事例

## 海外事例にみる野生生物観光への意識

自然環境、野生生物の保全と観光の調和を考え、ツアーコンテンツを発展させていく上で、海外の取り組みから学ぶことはたくさんあります。野生生物観光の先進地と言われる国々では、行政による制度設計だけでなく、民間の組織や個人が主体となって成功と失敗を繰り返しながら、自然環境と野生生物を守り、地域経済を発展させてきました。それは自主的な規制やルールの設定に見ることが出来ます。

日本は2003年の観光立国宣言を契機に、これまで主に文化の魅力を発信してきました。その国土は南北3000kmにおよび、多様な地形や気候を有する島国であり、独自の進化を遂げた動植物に溢れています。日本でしか出会えない野生生物、そして彼らがいる風景もまた、世界に発信できる日本の大きな魅力です。そして、インバウンド旅行者が求めるのは、安心して野生生物と出会える環境、野生生物との適切な距離を保つ、餌付けはしないなどの野生生物の生態への影響を極力少なくするための配慮です。

ここでは、野生生物の保護や自然環境の保全をベースに、野生生物観光と地域の発展の両立を進めた海外の事例を通して、野生生物観光に求められる視点や方策の一端をお伝えします。





# - 01 [イギリス・スコットランド アバディーン] The Royal Society for the Protection of Birds (RSPB) 観察はイルカに優しく陸上から ~海の生態系とその保全を学ぶ~

## ！ 注目ポイント

- ・陸地からのイルカ観察により影響をゼロに
- ・常駐しているガイドによる丁寧な解説
- ・学校への出前授業や博物館と連携した屋内アクティビティによる深い学びの提供

## 📄 取り組みの背景と概要

- ・スコットランドのアバディーンでは毎年、春から秋にかけてディー川の河口に集まるサケを追ってバンドウイルカが集まり、その姿を間近で観察することができます。この河口はスコットランド周辺海域に生息するバンドウイルカの重要な採餌場所であると同時に、街の主産業の一つでもある油田開発関連の大型船舶や漁船などが頻りに往来する港の入り口でもあります。
- ・このような人間活動による海の利用は今後も増加すると予想されています。市民の憩いの場であり、海の豊かさの象徴であるイルカが集まるスコットランドの海。この恵みを保ち、持続可能な海の利用を図るには、海洋生態系とその保全の重要性について市民の理解を深めることが不可欠です。
- ・NGOであるRSPBは2013年より、バンドウイルカや海洋生物の観察会、出前授業などを行うことで、市民や観光客が海洋生態系について正しく理解する機会を提供し、将来的な海洋生態系の保全活動に繋がる土台を築くための普及啓発活動を行っています。

### \*バンドウイルカ (英名: bottlenose dolphins)

イギリスの周辺海域に広く生息し、国内法 (the Wildlife and Countryside Act) によって保護されています。スコットランド海域に生息するバンドウイルカの個体数や生態調査は、NatureScotが主体となり大学機関などと共同して行なっています。



【NatureScot レポート】  
<https://www.nature.scot/naturescot-research-report-1021-site-condition-monitoring-bottlenose-dolphins-within-moray-firth>

## 🔭 ツアーの目的と代表的なツアー

- バンドウイルカの陸上観察
  - ・バンドウイルカが観察できる高台の丘にテントを設営して、普及啓発を目的にRSPBのスタッフが常駐し、訪れた人へ生き物の解説やNGOの活動を紹介。
- 海の生き物観察会
  - ・ガイドスタッフが同行して短いコースを歩き、ゲームなどを通して観察できた生き物の生態や海との繋がりを理解し、観察方法を学ぶ。
- 出前授業
  - ・小学校から大学までを対象にRSPBのスタッフが、スコットランドで観察できる海洋生物の生息数や食性などの生態について授業を実施。
- 博物館と連携した取り組み
  - ・市立博物館ではイルカチームのスタッフが海の生き物について学ぶ講座を実施。野外観察と連携することで、より深い学びの場を提供。

## ⚖️ 資金調達の方法

- ・一連の観察会やイベントの資金は、アバディーン市とWDC (Whale and Dolphin observation) とのパートナーシップにより運営され、宝くじ助成金 (the National Lottery Heritage Fund) やスコットランドの助成金 (Scottish Power Foundation) も得ています。
- ・企業から機材の補助  
Viking Optics社から観察機材 (双眼鏡) の提供を受けたことで、活動資金の大幅な節約につながり、提供企業は有名なNGOの観察会を通して自社製品が一般消費者に紹介される機会を得ています。
- ・RSPBオリジナルのピンバッジ販売  
観察会や出前授業時だけでなく、カフェやパブなどRSPBの応援企業でも販売され、活動収益となっています。イギリスに生息する生き物が形取られており、種類が豊富で気軽に購入することができます (1個1ポンド=約140円)。

## ➡️ 団体などの詳細はこちら

【団体ウェブサイト】  
<https://www.rspb.org.uk/get-involved/activities/dolphinwatch/>



## - 02

## 【オーストラリア 西オーストラリア州 ハメルン湾】 Hamelin Bay Holiday Park (海洋公園) 餌付けを止めて自然なエイの観察観光へシフト

### ！ 注目ポイント

- ・観光客による餌付けにより、エイが人やボートに接近するようになり、行動が変化したことが契機となり、餌付けによらない観察観光の取り組みを開始
- ・科学者が積極的に調査結果を地域にフィードバック
- ・法律による保護の網から外れても、自主ルールで保全

### ✓ オーストラリアの海洋観光のルール

- ・西オーストラリア州政府当局 (the Department of Biodiversity, Conservation and Attractions (BCA)) による商業事業のライセンス制度があります。ライセンスにはTクラスとEクラスがあり、Tクラスは、オペレーターの数に制限がありません。Eクラスは、「許認可制限しなければならない環境、管理、安全の理由」がある場合に発行されます。
- ・現在、エイの観光事業は特定の免許を必要としない一方で、他の観光事業、例えば、ジンベイザメの旅行者は、Eクラスの免許が必要とされています。

### ▶▶ 団体などの詳細はこちら

#### 【参考文献】

<https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/10941665.2018.1541186>

#### 【西オーストラリア州政府当局 (BCA)】

<https://parks.dpaw.wa.gov.au/know/types-licences>

### 📄 取り組みの背景と概要

- ・採餌するエイが間近で見られることで有名な西オーストラリアのハメルン湾のビーチは多くの観光客や地元住民が訪れる海洋公園です。このビーチにやってくる3種類のエイは通常、砂の中にいる甲殻類などを食べていますが、かつて、エイを観察する際に行われていた餌付けによって人やボートに近寄るようになりました。さらに、オーストラリアにはエイを観光産業から保護する法律がなく、海洋公園のレクリエーションゾーンであるこのビーチは、船の運航やマリンスポーツへの規制もありませんでした。このようにエイとその生息地の保全は難しい状況にあったのです。
- ・そこで、野生動物観光の研究者らは調査結果を積極的に公開し、レクリエーションフィッシングにより通称スタンピーと呼ばれるエイ (barbless stingray) が相当数捕獲されていることを報告しました。それを受け、地元住民600名以上の署名が集まり、オーストラリア水産省は、2012年にエイを釣りの対象外とし、このハメルン湾一帯をエイのサンクチュアリとすることとしました。現在では、看板に自主ルールを掲載して、餌付けの自粛や個体に触れないよう注意喚起がなされています。
- ・今後の課題として、観察による個体への影響調査や訪れる人が理解を深めるためにエイの生態や餌付けによる影響を記した解説看板の設置と普及啓発の必要性が指摘されています。さらに、司法行政を含めた条例やルールの設定による保全とツアーの両立が求められています。

### Column

#### ～ 海外ではすでに当たり前 ～ 自然と生き物に最大限配慮した観光ツアー

野生生物を観察するツアーは、対象となる生き物に十分に配慮していても、少なからず影響を与えてしまうのが現実です。しかし、このまま野生生物観光の需要だけが加速していった場合、その貴重な観光資源である野生生物そのものがいなくなってしまう危険性はほらんでいます。このような背景を受けて、海外の観光ツアーを紹介・販売するウェブサイトでは、自然や生き物に配慮した旅行商品だけを扱う方向への変化がみられます。

世界的にも有名な旅行口コミサイト、トリップアドバイザーは、自社のホームページに立ち上げたアニマルウェルフェア(動物福祉)ポータルの中で、今後トリップアドバイザーが紹介する動物を対象としたツアーは、自社が掲げる「動物福祉ポリシー」に合致したもののみを掲載すると宣言しました。

他にも、主に自然や動物を対象としたツアーを販売しているレスポンシブルトラベルでは、自社で販売するツアーにおいて独自の配慮や観察時のガイドラインを設け、その内容をホームページで掲載しています。さらに、UNEP(国連環境計画)やthe World Responsible Tourism Awardsの審査員などを務めたMatt alpole博士をアドバイザーとして迎え、野生動物の観察方法や注意点について指導を受けるなど、より影響の少ない野生生物ツアーを組み立てることに力を注いでいます。

【トリップアドバイザー (Tripadvisor)】

<https://www.tripadvisor.com/blog/animal-welfare-policy/>

【レスポンシブルトラベル (Responsible Travel)】

<https://www.responsibletravel.com/holidays/wildlife/travel-guide/guidelines-for-wildlife-watching>



## - 03 [インドネシア ラジャ・アンパット(バピティム島)] Misool Eco Resort ダイビングエコロッジから始まる海の再生と雇用の創出

### ！ 注目ポイント

- ・サメやウミガメなどに対する過剰な漁により失われかけた海の生き物に注目
- ・適切な管理手法を進め、民間主導で海洋保護区を拡大
- ・観光と地域振興(雇用の創出)の両立を達成
- ・独自の資金調達で安定的な保全活動を確保

### 📖 エコロッジの設立の目的と経緯

- ・かつてこの地域はサメやウミガメなどを対象とした過剰な漁により、海の生物多様性の危機が指摘されていました。地域行政と複数の海外NGOにより、この海域の緊急的な保全の必要性が指摘され、2006年に海洋保護区に指定されました。
- ・同時期にロッジの開設者二人がこの島を訪れ、その際にヒレが切り落とされたサメの死体が辺り一面に漂っている光景を見て衝撃を受けました。そして、この島にダイビング観光による海の保全を目的としたミズールエコリゾートの設立を決心し、2008年にはダイビングツアーの拠点となる、40名のゲストを迎えられる宿泊施設が完成しました。
- ・二人は公的な保護区の設立に先立ち、2005年に独自に地域コミュニティと425km<sup>2</sup>の海域をリース契約し、ミズール海洋保護区(Misool Marine Reserve)として、すべての生き物の採取禁止区域(No take zone)を設置しました。2010年には2回目のリース契約を交わし、海洋保護区は1220km<sup>2</sup>まで拡大されました。また、Manta ray research programでは1000個体以上のマンタの識別調査を行い、行政の政策に結果を提供しています。

### 🌐 地域との連携

- ・地域連携の一環として、再生木材やリサイクル資源を利用し現地の伝統的な建築様式のロッジを建設。ロッジで提供する食事は地元食材を使用するなど、地域資源の活用、地産地消に取り組んでいます。
- ・ゲスト向けに開催している料理教室では地元ハーブの調理方法を学ぶなど、地域の食文化の普及啓発も行なっています。

\* 1万インドネシアルピア(IDR)=75円換算

### 🔍 代表的なツアー

- ダイビング
  - ・シングルダイブ(80万IDR(約6,000円))
- シュノーケリング
  - ・シングルシュノーケリング(35.5万IDR(約2,660円))
- 宿泊
  - ・1人7日間(3,660万IDR(約27万5,000円))

### 🌿 保全の取り組み

- ダイビングツアー
 

ダイビングツアーの前には、必ずガイドによる注意事項のレクチャーを実施しています。以下はその一部です。

  - ・‘no-touch’ポリシーの徹底や保護区内での生き物の採捕を禁止(貝、サンゴ、ウニ含む)。
  - ・‘Pygmy Protection’ポリシーでは夜間ダイビング中のライト利用を制限し、タツノオトシゴへの影響を軽減。
  - ・‘reef-safe’ポリシーにより、サンゴに影響しない日焼け止めのみ使用可能。
- 雇用の創出
 

かつてサメやウミガメの密漁に携わっていた地元漁師を、海洋保護区内の密漁パトロールやウミガメの保護活動を行なうレンジャーとして15名を雇用し、密漁に関与する人々を減らすことにつながっています。ロッジで働くスタッフのほとんどが周辺地域の住民で、ロッジの設立により165名の雇用が地域に生まれました。

### 💰 資金調達

1年間有効な海洋保護区の入場料として外国人100万IDR(約7,500円)、インドネシア人5万IDR(約380円)を徴収しています。また、持続可能な観光業とサンゴ礁の保全を目的としたミズール基金を設立し、政府に頼ることなく海洋保護区の管理を行なっています。

### 👉 団体などの詳細はこちら

【団体ウェブサイト】 <https://www.misool.info/>  
 【参考文献】 UNWTO(2020) Misool eco loge. Sustainable Development of Wildlife Tourism in Asia and the Pacific Good Practices and their Implications. 61-65.



## - 04

## [アメリカ ミズーリ州 セントルイーズ] The World Bird Sanctuary(NGO) 野鳥保護施設による「傷病鳥」から学ぶ自然環境の治療

### ！ 注目ポイント

- ・猛禽類の治療・教育・保全の3つの柱とした活動
- ・傷病鳥を用いたレクチャーなど、寄付に繋がる工夫をこらした取り組みで施設の運営資金を確保
- ・専門スキルを活かして絶滅の危機にあったハヤブサとメンフクロウの野生復帰に貢献

### 👣 取り組みの経緯と概要

- ・野鳥保護センターで傷ついた野鳥(猛禽類)を治療し、野生復帰のリハビリトレーニングの後、生息地にかえす取り組みを行なっています。センターは、1977年に開設され、1.2km<sup>2</sup>の敷地に200個体以上の野鳥が保護されており、専門の獣医師とトレーナーによって野生復帰のための治療を受けています。
- ・傷病鳥となった環境要因の根本解決である環境治療も含めた「治療、教育、保全」の3つの柱となる活動を通して、様々な環境にすむ野鳥とその生息地の将来にわたる保全を目指し、ひいては自然界全体の正常な生態系の回復を活動のミッションとしています。
- ・保護された猛禽類は、傷病の原因となっている様々な問題を普及啓発する役割を担っており、センターは野生鳥類の学習施設としても機能しています。

### 🍃 保全の取り組み

- ・終生飼養となった個体は鷹匠トレーニングを受け、傷病となった原因や種の生態などの紹介に起用されます。バードショーや動物園、学校、野球の試合会場などがその活躍の舞台で、普及啓発の一役を担っています。
- ・ミズーリ州のレッドリストで希少種に指定されていたメンフクロウの繁殖に成功し、繁殖個体の放鳥と保護個体とを合わせて1000個体以上の野生復帰を実現しました。生息数が増えたことで2008年には希少種の指定が解除されました。
- ・DDTなどの影響で100年近く野生繁殖が確認されず絶滅寸前だったハヤブサの繁殖に1991年に初めて成功し、現在では生息地に再導入した8ペアがセントルイーズ内で繁殖しています。ミズーリ州政府との連携で、リアルタイムカメラにより繁殖の様子が捉えられ、その映像が公開されています。

### 🔍 教育面を重視した代表的なイベント

- センターの見学(無料)
    - ・夜間や日中など種にあわせた野鳥観察会(無料)
  - フクロウのバードショー&生息地散策ツアー
    - ・10人を上限とし、2つのグループに分けるなど野鳥への負担軽減に努めている
    - 大人20US\$ : 約2,180円
    - 子供15US\$ : 約1,635円
  - 傷病個体を用いた解説や捕食の様子を紹介するトークイベント(無料)
- この他にも数多くのイベントを実施

\*1 アメリカドル(US\$) = 109円換算

### 💰 資金調達、寄付、クラウドファンディングなど

- ・センターの運営資金は、寄付やグッズ販売、有料イベントの開催、クラウドファンディングなど様々な方法を取り入れています。
- ・クラウドファンディングによる支援の呼びかけはFacebookを活用しています。
- ・支援者がFacebook上で自身の誕生日祝いとしてプレゼントではなく「寄付」を募り、全額をセンターに贈るイベント型寄付もあります。

### ✂️ 教育・ボランティア活動の場の提供

- ・対象の年齢に合わせて構成されたトークイベント(各20分~1時間)は、子供たちが段階的に学びを深められるように工夫されています。
  - ・インターンシップやボランティアの受け入れは、実際の治療や収容されている個体の飼養を通して、より専門的に学ぶ場を提供しています。
- \*ジュニアボランティア制度(13才以上)  
\*インターンシップ(18才以上)

#### \*傷病鳥となる要因

傷病となる要因は様々です。主なものとして、車両との衝突、窓ガラスや電線への衝突、有刺鉄線や釣り糸が絡まることによる怪我、ペットから受けた怪我、化学薬品などによる中毒、狩猟による怪我や弾丸から流出する鉛による中毒、ウイルス感染など、そのほとんどが私たちの日々の生活に由来しています。

### 👉 団体などの詳細はこちら

【団体ウェブサイト】

<https://www.worldbirdsanctuary.org/>

[カナダ ブリティッシュコロンビア州] Great Bear Tourism / Comercial Bear Viewing Association (CBVA)

## - 05 ~ハイログマ(グリズリーベア)の棲む森で~ 環境に配慮した安心感とともに非日常の体験を提供

### ！ 注目ポイント

- ・ツアー会社が集まって団体を設立し、ガイド認定プログラムを開発し、統一ルールで観察圧の軽減を図る
- ・高額なツアー価格に値するロングステイ型の非日常体験を提供
- ・参加者から徴収した保全費用を生息数調査(別団体実施)に活用

### 📖 取り組みの経緯

- ・カナダのブリティッシュコロンビア州はハイログマの生息密度が高く、高確率で観察できる世界有数の生息地として有名です。そのため、複数のツアーガイド会社によりハイログマの観察ツアーが行われており、観察ツアーの持続可能な運営と生息地の保全に関するコンセンサスを得ることが重要な課題でした。そこで、複数あるツアー会社から24社が集まり、協会(Comercial Bear Viewing Association: CBVA<sup>※</sup>)を設立しました。CBVAのウェブサイト上では観察ツアーに参加する際には、その影響に十分に配慮しているツアー会社を選ぶよう呼びかけています。さらにCBVA設立の目標の一つとして挙げられていた、ハイログマのトロフィーハンティング廃絶は、2018年にブリティッシュコロンビア州が全面禁止措置を発表し達成されました。
- ・ツアー例として、CBVAの会長が運営するグレート・ベア・ロッジが提供するツアーでは主にハイログマを観察し、その生態や森の中での役割などについて生態学者であるガイドから詳しく解説を聞くことができます。
- ・ウェブサイトでは、ハイログマ以外にも観察できる生き物を、その遭遇頻度とともに紹介しています。

※CBVA

最新研究により観察技術と手法の改善に努め、ガイド認定プログラムを開発。業界の発展進化だけでなく、人とクマの共存に関わる研究に資金を提供しています。

### ▶▶ 団体などの詳細はこちら

【団体ウェブサイト】

<https://greatbearstours.com/great-bear-rainforest/>

【CBVA】 <http://www.bearviewing.ca/>

### 🔭 代表的なツアー

川岸に浮かぶ水上ロッジへのアクセスは、セスナ機のみとなるため運賃はツアー価格に含まれます。

■ 観察ツアーは2種類あります。

- ・ツアー①: 小さなボートを利用するリバークルーズ
- ・ツアー②: 川沿いの観察デッキや林内のトレッキングコースを散策

■ 宿泊プランも2種類です。

- ・プラン①: 4泊(ツアー①: 3泊がロッジ)
- ・プラン②: 7泊(ツアー①②統合)

[価格:CAD]	4泊	7泊
春 (5/7~6/29)	3305 (約28.4万円)	5890 (約50.6万円)
夏 (6/30~8/19)	2750 (約23.7万円)	4765 (約40.9万円)
秋 (8/20~10/19)	4730 (約40.7万円)	8735 (約75.1万円)

### 🌿 保全の取り組み

- ・参加者からツアー費用とは別に「BC Conservation License(保全金)」として追加料金を徴収し、集まった資金はCBVAが生息数調査などの保全活動に資する目的に活用します。この保全金を導入する前は、ツアー価格に上乗せとなることに不安を覚える事業者の声もありました。しかし、参加者はむしろ自身が保全活動に貢献できることに喜び、2019年には11,400CAD(約98万円)が集まりました。
- ・保全金は、観光客と住民一律で日帰り客が10CAD(約860円)、宿泊客が25CAD(約2,150円)です。

#### \* ロッジ運営における自然への配慮

- ・施設にはグリーンエナジーを導入し、ロッジの建設にはリサイクル可能な素材を利用しています。
- ・野生動物の誘引トラブルを避けるため、利用者には香水や匂いのする化粧品の使用、カメラのフラッシュ利用の自粛を依頼しています。

\*1 カナダドル(CAD)=86円換算

# 野生生物観光の関係法令とその活用

野生生物観光は、地域が守りともに生きてきた生き物や自然の魅力を旅行者に伝えられるだけでなく、観光を通じた消費活動や受け入れ環境整備などを通じて、地域づくりにもつながる取り組みです。観光の対象とする生き物とその生育・生息地を守ることは、大切な自然環境を守ることだけにとどまらず、事業の原資でもあり、持続的な事業展開にも欠かせません。ここでは関係法令が活用いただけるよう概要をご紹介します。

## ■自然や生き物の情報を知りたい

地域で活動する研究者や専門家、大学・博物館などの研究機関、地域のビジターセンターや保全団体などと連携することは、野生生物の生態や生息地について情報を得たり、適切な保全活動の方法を検討することの一助となります。

また環境省では、概ね5年ごとに森林や草地といった植生、動植物の生息・生育分布、干潟や藻場といった環境の“場”の広がり具合などの自然環境に関する全国的な調査(自然環境保全基礎調査)や各生態系の状態の把握に必要な生物情報などを長期間継続的に調査する「モニタリングサイト1000」などを実施しています。これらの調査結果の多くは、生物多様性センター(<https://www.biodic.go.jp>)のウェブサイトで閲覧・ダウンロードが可能であり、地域の自然情報を得ることができます。

## ■コンテンツの対象とする生き物や自然を守りながら観光に活用したい、接し方や取り扱いを知りたい

野生生物観光では、生き物の生態把握のための調査や保全のための取り組みなどを、そこでしか体験出来ないユニークなコンテンツとして活用することもできます。

### 絶滅のおそれのある野生動植物種の保存に関する法律(種の保存法)

絶滅のおそれのある種を希少野生動植物種(希少種)として指定し、希少種とその生息地を守るための法律です。国内に生息する希少種については、捕獲や譲渡などの原則禁止などを定めています。希少種の観察や地域における保全活動の体験などが旅行の付加価値を高められる可能性があると同時に、生息地情報がみだりにSNSなどで拡散されることのないような対策も必要になります。

種の保存法以外にも都道府県や市町村の条例により希少な種が指定されている場合もあります。また、文化財保護法により特別天然記念物や天然記念物として保護されている種もあります。

### 鳥獣保護管理法

日本に生息する鳥獣(鳥類及び哺乳類)の捕獲規制や狩猟に関するルール・仕組みを定めています。また、狩猟による捕獲が禁止される「鳥獣保護区」の指定や鳥獣の保護のため捕獲方法に規制を設ける地区の指定方法なども定めています。

鳥獣の捕獲に伴う危険の予防、生物多様性の確保、農林水産業の健全な発展のため、鳥獣の「保護」と「管理」を目的とした制度であり、狩猟や農林業被害、ジビエなどを題材にしたコンテンツに係る法令です。

### 外来生物法

国内に侵入している外来生物のうち、生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼすものを特定外来生物に指定して対策を講じるための法律です。指定種の生きた状態での飼育、保管、運搬、譲渡などは原則禁止されています。指定種を扱う活動に関する法令で、駆除した植物は枯死させた上で運搬する必要があるなど、指定種の取扱いには注意が必要です。

## ■コンテンツを展開するための組織や仕組みをつくりたい

### エコツーリズム推進法

協議会を設置し、地域でエコツーリズムを推進する体制や計画について協議して全体構想を作成し、市町村から国に申請します。認定されると国が広報などの支援を行います。また自然観光資源を「特定自然観光資源」として指定することで、保全措置を講じることができます。地域内で連携して野生生物観光を進める際に活用が考えられる法律の一つです。

## ■保護された場所で野生生物を対象としたツアーを実施したい

自然環境を守る法律は、対象地(所在地)や目的、用途などにより異なります。法律の目的や規制内容を理解することで、自然環境に配慮したツアーの実施につながるるとともに、守られた地域で実施することが旅行者に特別感をもたらすことで、ツアーの付加価値向上にもなり得ます。

### 法律に基づく保護地域などにおける行為

自然公園法に基づく国立公園や国定公園などの特別保護地区や特別地域、自然環境保全法の各種保全地域、国有林野の保護林制度による森林生態系保護地域、文化財保護法による文化財、都市緑地法による特別緑地保全地区などに指定された場所では、行為の制限があります。

コンテンツの作成やツアー展開を行う際には、実施しようとする場所の指定状況や規制内容を確認し、事前に必要な手続きを行い、適正な利用をすることが必要です。

ツアーを通じて、旅行者の理解や意識向上を図りながら満足度を上げていくことで、保全と利用のサイクルが回ることが期待されます。



環境省  
自然環境局野生生物課  
発行：2021年3月

